

## 三浦半島東京湾岸から採集されたトゲナシヌマエビ ( 十脚目 : ヌマエビ科 )

萩原清司 \*

*Caridina typus* (Decapoda: Atyidae)  
collected from the coastal area of Tokyo  
Bay of the Miura Peninsula, Japan

HAGIWARA Kiyoshi\*

キーワード: トゲナシヌマエビ, ヌマエビ科, 三浦半島, 東京湾, 分布

Key words: *Caridina typus*, Atyidae, Miura Peninsula, Tokyo Bay, distribution

トゲナシヌマエビ *Caridina typus* H. Milne Edwards, 1837は, インド・西太平洋沿岸域の温帯~熱帯の海に流入する河川に生息する, 淡水性のヌマエビ科Atyidaeヒメヌマエビ属の小型エビ類で, 国内では日本海岸で島根県以西, 太平洋岸では房総半島以西に分布することが知られる (新島, 2001; 林, 2007)。

本種の三浦半島域における分布は, これまで相模湾岸の河川のみであった (相模湾海洋生物研究会, 1995; 山本, 2003)。この度, 三浦半島東京湾岸で初記録となる本種個体が, 横須賀市自然・人文博物館付属馬堀自然教育園内の池 (第1, 2図) で採集されたので, その生息環境と採集状況について報告する。

本報をまとめるにあたり, 千葉県立中央博物館海の分館の奥野淳児氏には文献に関する情報をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

### 採集標本

YCM-C 991, 5個体, 採集日20111006, 神奈川県横須賀市馬堀町4丁目, 横須賀市自然・人文博物館付属馬堀自然教育園・下の池 (北緯35° 15', 東経139° 44' : 第1, 2図)。



第1図 採集地点.

### 生息環境

今回生息が確認された地点は, 1959年に開設され1985年に改修された池である。この池は湧水および雨水が水源で, ポンプと配管によって結ばれた人工水路との間で水の循環が行われている。満水位を超えると池の水はオーバーフローし, 地中に埋設された導水管を通じて約500m離れた馬堀海岸に排水されている。同池ではこれまでに, ヌマエビ *Paratya compressa*, ヤマトヌマエビ *Caridina multidentata*, ヒラテテナガエビ *Macrobrachium japonicum*, アメリカザリガニ *Procambarus clarkia* といったエビ類の生息が確認されており, ヤマトヌマエビについては三浦半島東京湾岸で唯一の生息地となっている。

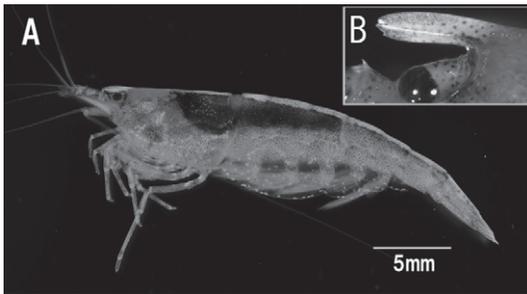
### 採集状況

筆者が展示水槽よる生態展示用のエビ類を確保するため, タモ網を用いて池内で採集を行ったところ, エビ類52個体が採集された。そのうち24個体は, 眼上棘が欠くこと, 歩脚に外肢を欠くこと, 第2歩脚の腕節が長いこと, 額角は短く上縁に鋸歯を欠くこと, 体側に明瞭な斑紋をもたないこと, などの特徴からトゲナシヌマエビと同定された (山本, 2003; 林, 2007)。採集されたトゲナシヌマエビは, 頭胸甲長1.5~2.5mmの稚エビと5~7mmの成体が12個体ずつで, 成体のう



第2図 採集地状況写真.

ち7個体が抱卵メスであった。採集個体のうち5個体を横須賀市自然・人文博物館甲殻類資料(YCM-C)として保存した。同時に採集されたその他のエビ類は、ヌマエビ2個体、ヤマトヌマエビ11個体、テナガエビ科稚エビ2個体、アメリカザリガニ8個体であった。



第3図 トゲナシヌマエビ *Caridina typus* H. Milne Edwards, 1837. YCM-C 991: A, 生鮮標本; B, 額角の拡大図.

### 考察

本種は元来、インド・西太平洋の赤道付近に分布の中心を置く南方系の種であり、三浦半島は分布の

北端にあたっている。相模湾海洋生物研究会(1995)が、神奈川県初記録となる個体を三浦半島の相模湾岸にそそぐ川間川と松越川で記録して以降、急速に分布を拡大して相模湾岸の河川では普通種となった。同属で本州中部から台湾にかけて分布するミゾレヌマエビ *Caridina leucosticta* も2000年頃から三浦半島相模湾岸で出現をはじめ(山本, 2001), 現在では相模湾岸の普通種となり、東京湾岸の横浜市境川でも記録されている(樋口ほか, 2000)。両種とも幼生時代の一時期の生活を汽水域または海域に依存する両側回遊型の生活史を有していて、分布拡大には幼生期の分散が関与していることが明らかである。相模湾岸の繁殖個体群の増加が分散幼生の密度を上昇させ、東京湾岸での着底・遡上の確率を上げているかもしれない。また、近年急速に分布を拡大していることから、河川や沿岸域の水質変化や温暖化などの影響を受けている可能性も否定できない。今後、遡上生態、幼生分散の経路、周辺環境の変化などにも注意しつつ本種の出現状況の観察を続けたい。

### 引用文献

- 林 健一 2007. 日本産エビ類の分類と生態II. 292ページ. 生物研究社.
- 樋口文夫・水尾寛己・福嶋 悟 2000. 横浜の淡水エビ・カニ類の分布状況(1999~2000年). 横浜の川と海の生物(第9報・河川編), 横浜市環境保全局環境保全資料, (190): 171-182.
- 新島偉行 2001. 千葉県における淡水十脚甲殻類の分布について. 千葉生物誌, 51(2): 59-81.
- 相模湾海洋生物研究会 1995. 横須賀市内河川の大型甲殻類. 横須賀市内河川水生生物基礎調査報告書: 43-47.
- 山本健一郎 2001. 三浦半島初記録の淡水産エビ類ミゾレヌマエビ(十脚目:ヌマエビ科). 横須賀市博研報(自然), (48): 145-146.
- 山本健一郎 2003. 三浦半島のヌマエビ科エビ類の分布. 横須賀市博研報(自然), (50): 43-50.